文京区シンボルマーク
▲区制70周年を契機に制定した区のシンボルマークです。
文の京（ふみのみやこ）
区報ぶんきょう

発行／文京区
編集／オリンピック・パラリンピック担当
〒112―8555 文京区春日１―16―21
代表☎（3812）7111
http://www.city.bunkyo.lg.jp/

オリンピック・パラリンピック

こども新聞

2021年（令和３年）
７月16日　第11号

各面の内容

2、3 聖火リレールート歩く
4 区ゆかりの選手

オリンピック・パラリンピックこども新聞は、こどもたちが記者になって取材や写真撮影に取り組み、みなさまにおとどけする新聞です。

難民選手団を応援

国連ＵＮＨＣＲ協会の天沼耕平さんから質問を受けるこども記者

ホストタウン特別講座

文京シビックセンターで６月20日の世界難民の日に文の京（ふみのみやこ）ホストタウン特別講座が開かれました。

11カ国から29人参加

難民は戦争などで外国に逃げて生活している人です。東京２０２０オリンピックでは11カ国から29人の難民の選手が参加します。前回より19人も増えました。その中には柔道の選手もいます。これからもっと難民の人たちのことを勉強して、小さなことでも自分ができることを考えて、難民の人たちを応援していきたいと思います。（小５／ゆき）

開会式で入場行進する難民選手団＝ブラジル・リオデジャネイロのマラカナン競技場で2016年８月（毎日新聞社提供）

心や体の健康を維持

国連ＵＮＨＣＲ協会の天沼耕平さんによると、難民の人たちにとってスポーツは宝物です。心や体の健康を維持することができるからです。難民問題を解決するためには「知る」「広める」「参加する」「寄り添う」が求められていると教えてくださいました。（小６／田中杏依）

前向きに強く生きる

難民の子どもたちの77％は小学校に通えていますが、23％は家の仕事をしたり、身を売られたりすると聞いて、とてもショックでした。難民になっても、自分の能力をいかして大変な中で強く生きているのは前向きですごいなと思います。紛争でけがをしても前に進み続けていることに心を打たれました。（小５／中村百合香）

紛争で右足を失っても

私は今まで、難民という言葉を知りませんでした。パラリンピックに参加する難民選手団の中には、右足を紛争で失くしてしまった選手がいます。命を落としたりけがをしたりする紛争や戦争をなくすために、自分にできることを考えて行動することが大事だと思いました。（小４／加藤大和）

自分の発想ふくらませ

私は初めて難民という言葉自体を知りました。乳幼児も小学生も紛争から逃げ回り苦しんでいたと聞き、ありえないと思いました。私は特別講座で、他の人に自分の意見を聞いてもらい、他の人の意見を聞くことによって、自分の発想をふくらませることができました。（小４／中澤琉璃）

スポーツで世界へ発信

難民には母国を追われただけでなく、夢を奪われた人や家族と離れた人、家を失った人などがいます。家族とテレビを見たり、友達と笑い合ったり、国籍があることも当たり前ではないかもしれません。中には、スポーツを通して難民について世界中に伝えている選手もいます。そうした人たちの姿勢に感銘を受けました。（中３／ライノ）

幸運見つけ走り抜く

難民の母国が早く平和になってほしいと思いました。世界の１００人に１人が平和な生活や家族、住む所や食事や水、お金が失われていることを知り、心がいたくなりました。文京区の姉妹都市カイザースラウテルン市が難民受け入れをしていると知り、ぼくたちも力になりたいです。地雷で片足を失い義足で走るパラリンピアンの写真を見て、どんな状況でも幸運を見つけ走り抜く生き方に感動しました。（小４／北悠人）

身近な人に教えたい

東京２０２０オリンピックに出場する難民選手団はさまざまな国籍の方がいます。マソマ・ザダさんはアフガン難民で自転車選手として世界で活躍。現在はフランスに住み、アフガン女性が自由にサイクリングできるように、と活動しています。私は今後、難民問題や選手について身近な人に教え、できることを考えていきたいです。（中３／大迫環）

文京区は6月29日、東京2020パラリンピック難民選手団のホストタウンに全国で初めて登録されました。

壱岐坂を下る＝中澤瑠璃撮影

希望を持ち続けて

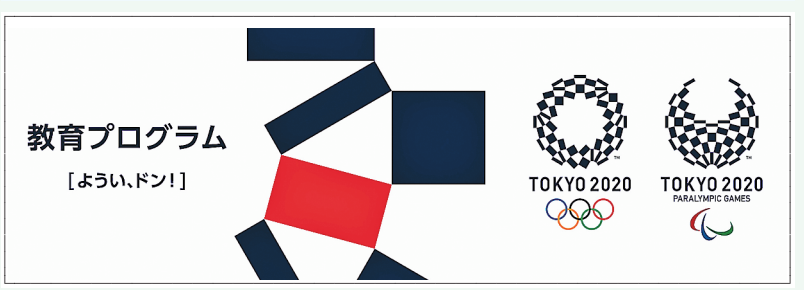
難民の人たちは自分の国に住めなくなり家族とも離れ、可哀そうだと思いました。だけど、希望を持ち続け、オリンピック・パラリンピック選手になったことがすごいと思いました。難民の人がいない平和な世界になればいいと思います。（小５／数田麻華）

理解して寄り添う

難民の子どもで小学校に行けるのは77％、中学高校は31％、大学は３％だけです。行けない理由は家の手伝いや戦争に行かなければならなくて、自分の能力を発揮できず、不公平だと思いました。不公平をなくすには、難民のことを理解し、考え、寄り添うことが大切です。（小４／垣本律紀）

SDGsを意識して

男子競泳のラミ・アニス選手はシリア出身です。14歳から水泳を始め、トルコに避難し、海路でギリシャに渡り、そこから歩いてベルギーにたどり着き、2016年のリオ大会100㍍バタフライに出場しました。SDGsを意識して生活することが、間接的に難民の支援につながればいいなと思います。（小５／田中沙英）

一人一人が自覚して

東京2020大会では難民選手団として、オリンピックには29選手が12種目に、パラリンピックには６選手が出場する予定です。文京区はパラリンピック難民選手団のホストタウンとして応援します。私たち一人一人が難民の問題を自覚することが、難民を増やさないための第一歩だと思いました。（小６／加藤三可里）